

JIC インフォメーション

第215号 2021 年 07 月 10 日

年 4 回 1・4・7・10 月の 10 日発行

1 部 500 円

発行所: JIC 国際親善交流センター 発行責任者: 伏田昌義

<https://www.jic-web.co.jp>

東京オフィス: 〒160-0022 東京都新宿区新宿 1-10-5 岡田ビル 6 階 TEL: 03-3355-7294 jictokyo@jic-web.co.jp

大阪・ロシア留学デスク: 〒540-0012 大阪市中央区谷町 2-7-4 谷町スリースリースビル 7 階 TEL: 06-6944-2341

はりねずみのジュニア



ロシア・旧ソ連

国際交流誌



(写真) 左上＝新生ロシア 30 周年写真展(2 頁)、右上＝ペチカのある生活(4 頁)、左下＝45 年前のプスコフ・クレムリン(9 頁)、右下＝日本ロシア学生交流会(10 頁)

<https://www.jic-web.co.jp>

《日ロ交流情報》

日露地域・姉妹都市交流年記念コンサート、ほか……………2P

《投稿》

身近にロシアを感じる

「ペチカのある生活」……………内海 里美……………4P

キルギスに暮らす(2)

「家庭でのゴスチとキルギスの料理」……………倉谷 恵子……………6P

45 年前の思い出「プスコフ市での 7 カ月」……………神谷 昇……………9P

《日本ロシア学生交流会》

30 大学のメンバーが集う日露交流サークル……………上原 逸人……………10P

《本の紹介》 ポリショイ秘史

帝政期から現代までのロシア・バレエ(2)……………斎藤 慶子……………13P

物語を忘れた外国語(黒田龍之助著)……………14P

《エッセイ》 遥かなるロシア～昔々の物語……………岩佐 毅……………14P

《講演録》 大阪日ロ協会オンライン講演会&映画会

ロシア映画の魅力～芽吹く若い力……………守屋 愛……………17P

JIC では、Jクラブ(JIC 友の会)会員を募集しています。
年 4 回の情報満載のインフォメーションをお届けします。

日ロ交流情報

7 月 8 日、政府はオリンピック開催前の東京に 4 度目となる緊急事態宣言の発令を決定しました。オリンピックも基本的に無観客開催です。ワクチン接種の進展とともに映画やコンサート、スポーツ観戦などのイベントが徐々に活発化し、ようやくコロナの「出口」が見えてきたかと思ったのも束の間、デルタ株変異ウィルスによって再びコロナ感染者数が増勢に転じた中では、これは致し方ない措置です。しかしそれでも、ワクチン接種が日本の成人人口の半分以上を超えるであろう 10 月頃には社会生活がかなり正常化に向かうのではないかと期待されるようです。

以下、この春以来コロナ下でも各地で取り組まれた日ロ交流活動の一端を紹介します。(編集部)

ロシア文化フェスティバル in Japan

日露地域・姉妹都市交流年記念コンサート

7 月 1 日、東京の銀座ブロッサムにて、ロシア文化フェスティバル・スペシャルコンサート(日露地域・姉妹都市交流年記念コンサート)が開催されました。

コンサートは、ソプラノ歌手・中村初恵さんの「ヤポーニヤ&ロシア」(文化フェスティバルのテーマ曲)の歌唱で始まり、エカテリーナ(歌手)、Natsuki & Vitaly(デュオ)、ドミトリー・フェイギン(チェロ)、イリヤ・イーティン(ピアノ)など日本在住のロシア人アーティスト、また福島明佳(フルート)、木曾真奈美(ピアノ)、加藤登紀子(歌手)、北川翔(バラライカ)などロシアゆかりの音楽家たちが、それぞれの楽曲を披露しました。



コンサートに先立って、ミハイル・ガルージン駐日ロシア大使、安倍晋三ロシア文化フェスティバル日本組織委員会委員長のあいさつがあり、この記念コンサートがロシア文化フェスティバルの今年のオープニングとなりました。

新型コロナの影響により、当初 6 月末に予定されていた「ロシアの新星コンサート」はアーティストが来日できず秋に延期され、そのためスペシャルコンサートの出演者も日本在住アーティストに差し替えられての開催となったわけですが、コロナ終息の道筋が見えてくるこの秋以降には、日ロ文化交流イベントの本格的な再開が実現することを期待したいものです。



新生ロシア連邦30周年記念写真展 6月に東京・有楽町で開催

「1991-2021 新生ロシア連邦 30 周年記念写真展」が 6 月 14 日～19 日、東京・有楽町の交通会館で開催されました(主催:ロシア文化フェスティバル組織委員会、ほか)。

ソ連邦解体から 30 年。ロシアは社会主義国から資本主義国へと大きく変わりました。

写真展のカタログ(24 頁カラー)には、「発展」「モスクワ新名所」「健康」「ファッション」「日常生活」「宇宙開発」などいくつかのテーマにわけて新しいロシアの姿が映し出されています。

先着 10 名様に写真展カタログをプレゼントします。

ご希望の方は、E-mail で「写真展カタログ希望」とお申し込みください。→ jictokyo@jic-web.co.jp

日ロ友好愛知の会がオンライン講演会 「今だからこそロシア文学の魅力」沼野充義先生

7 月 3 日、日ロ友好愛知の会(小林功・理事長)の総会とオンライン講演会が行われました。講師はロシア東欧文学者の沼野充義先生(名古屋外国語大学副学長)。「今だからこそロシア文学の魅力」と題して、プーシキン、トルストイ、ドストエフスキーといったロシア文学の巨人たちを、初心者にも分かりやすく紹介解説する内容で、参加者からは「どれか 1 冊でも作品を読んでみたくなった」といった感想が寄せら

れていました。

愛知の会が交流を続けているクラスノヤルスクからも日本語を勉強している学生たちが参加したとかで、参加者は総勢 50 名。ロシア人参加者の多い、オンラインならではの広がりを感じさせる講演会でした。

なお、日ロ友好愛知の会は、昨年 10 月に引き続き今年 5 月にもオンラインでシベリア抑留犠牲者の墓参を行うなど、活発に活動を行っています。

大阪日ロ協会がオンライン講演会・映画会 守屋愛先生の講演と「予想外のでき事」を上映

5 月 22 日、大阪日ロ協会（藤本和貴夫・理事長）のオンライン・イベントが開催されました。

「ロシア映画の魅力」と題する守屋愛先生（慶應義塾大学、お茶の水女子大学・ロシア語講師）の講演と映画「予想外のでき事」（A・ムイシュキン監督、2019 年『第 3 回ロシア映画祭』上映作品）の上映が行われました。



映画「予想外のでき事」の一場面。主演のリーザ・アルザマソフ（左）とマクシム・コロソフ（右）

守屋先生の講演では、日本で公開されるロシア映画は国際映画祭で受賞したような話題作が多いが、それはロシアで作られる映画のごく一部で、最近では若手監督の手になるアクション映画や SF 映画、コメディなど様々なジャンルの作品が多数制作されていることなどが紹介されました。

映画「予想外のでき事」では、ロシアのとある田舎町で出会った男と女の物語が、それぞれ場所とストーリーを変えた 4 部作でコミカルに描かれています。メロドラマの味のついたショート・コメディに、ロシア社会の一断面が投影されており、参加者はそれぞれの受け止め方で、現代ロシア映画作品を味わっていました。

主催の大阪日ロ協会によると参加者は 70 名以上で、うち半分は大阪および関西圏からの参加者だったが、残り半分は東京・神奈川・愛知・佐賀などからの参加だったとのこと。これまでにない大阪以外の地域からの多数の参加は、この種のオンライン・イベントの新しい可能性を感じさせます。

大阪日ロ協会では秋にもまた次のオンライン講演会を計画しています。

ロシア文化フェスティバル この秋の注目イベント

シャフナザーロフ映画祭 2021

ロシア映画の巨匠カレン・シャフナザーロフ監督の「ホワイトタイガー」（2012 年）、「アンナ・カレーニナ」（2018 年）、「ジャズメン」（1983 年）、「ゼロシティ」（1988 年）が一挙集中上映されます。

- 日時：9 月 9 日（15:00-19:30）、10 日（15:00-18:30）
- 会場：東京・浜離宮朝日ホール（入場料 1 日 1000 円）
- 問合せ：ロシアン・アーツ TEL:03-5919-1051

モイセーエフバレエ来日公演

20 世紀最大の舞踊家・バレエ振付師の一人イーゴリ・モイセーエフ（1906-2007 年）によって 1937 年に結成されたイーゴリ・モイセーエフ記念国立アカデミー民族舞踊アンサンブルが 10 月に 26 年ぶりの訪日公演を行います。

- 公演日程
- 10 月 18 日（月）17:00 開場 18:00 開演
茨城・ザ・ヒロサワ・シティ会館大ホール
- 10 月 19 日（火）17:30 開場 18:30 開演
東京・めぐろパーシモンホール大ホール
- 10 月 20 日（水）17:30 開場 18:30 開演
横浜・関内ホール大ホール
- 10 月 21 日（木）17:30 開場 18:30 開演
東京・新宿文化センター大ホール
- ※全席指定：S 席 12000 円 A 席 8000 円
- 問合せ：ロシアン・アーツ TEL:03-5919-1051

インターネット・ミュージアム 「日本のなかのロシア」

「日本のなかのロシア研究会」とロシア文化フェスティバル組織委員会が、各地にある日本とロシアとの交流史跡を紹介するインターネットミュージアムを開設しました。

日本最初のロシア領事館（函館）、ニコライ堂（東京）、日露和親条約締結の舞台（静岡県下田市）、大黒屋光太夫記念館（三重県鈴鹿市）、日ロ友好の像（兵庫県洲本市）など国内 165 ヲ所の史跡を紹介しています。資料だけでなく音楽とナレーションによる動画もあり、楽しみながら知識を広げられる内容となっています。皆さんの住んでいる地域や町でも「日本のなかのロシア」を発見できるかもしれません。是非のぞいてみてください。

公式ホームページ → <http://www.yaponiya-russia.net/>

静岡県在住の内海里美さんから面白い記事を投稿していただきました。ロシアの暖炉＝ペチカを日本で作っている職人さんが長野県伊那市にいらっしゃり、古民家を改修してペチカを取り付けてもらって、「ペチカのある生活」を楽しんでいるとのこと。どんないきさつなのでしょう。内海さんの投稿記事をお楽しみください。(編集部)

身近にロシアを感じる ペチカのある生活

内海 里美 (静岡県在住)

ペチカに出会って

10 年ほど前に仕事を辞めて旅に出た。一年ほどの旅であったが、旧ソ連圏である中央アジアの文化が面白く、半年ほど滞在していた。そこで筆者の目を惹いたのがペチカである。滞在時は、夏から秋にかけてであったが、カザフスタンや、タジキスタンの標高の高い地域では、冷え込み氷点下になることもあった。実際にペチカを使用し、その心地よい暖かさ魅了された。暖かさだけでなく、特定の植物の木や葉をペチカで灰にして眼や皮膚疾患に使ったり、お湯で溶いて飲ませたりも昔からするそうである。ペチカの焚口にレンガを入れ、取り出した上に刻んだ葉をのせて燻蒸し、吸入することで喘息の治療にも利用されるそうだ。

ペチカは、中国のウルムチ、カザフスタン、ウズベキスタン、キルギスタン、タジキスタン、トルクメニスタンだけでなく、その先の旅路であったトルコ、なんとイランの山岳部でも見ることができた。また、旅行者同士の会話から、ボスニアヘルツェゴビナやセルビア、ルーマニア等でも田舎の方ではペチカが使われているという話を聞いた。



(写真は Wikipedia から引用)

すっかりペチカに魅了され、その後も連休の度に比較的足を運びやすいサハリン、ウラジオストクなど、ロシアの各都市に足を運ぶようになった。

古民家改修とペチカの導入

そんな筆者にペチカ導入のチャンスが訪れた。それまで住

ロシア料理で有名なガルショークであるが、トルコやイランのペチカで作ってもらい食べさせてもらうことが何度かあった。このあたりの地域はいろいろな文化がミックスされ、意外にもペチカは多くの国々で使われているようである。



カザフスタンのアスタナ郊外の民家にあったペチカ
上部で横になれるつくり



写真はタジキスタンのムルガブ民家にて
いろいろな文化がミックスされているのがわかる

んでいた神奈川から、実家のある静岡への移住である。実家から近い、値段が安い、好きに手を入れられる、という理由で古民家を手に入れた。

昔の作りということで土間があり、床下はもちろん土。建具も木製、隙間風があり冬は震えるような寒さである。しかし場所は広く在来工法ではないため、柱さえ残しておけば自



由に間取りを変えられる。ペチカを導入するにはもってこいの環境なのである。

シベリア抑留とペチカ～ペチカ職人との出会い

古民家改修の参考に長野県諏訪に旅行した時のことである。マサヤゲストハウスという宿が旅の目当てであった。築百年以上の古民家を自分たちの手で改修し、建築家の藤森照

信氏へのオマージュとして檜の木を並べた間に漆喰が塗られた床。その仕上がりを見に行ったのである。しかし目を奪われたのは、改修された家でもなく床でもなく、一階部分の中央に鎮座していたペチカであった。「このペチカは職人さんがいる?!」尋ねると、驚くべき返事が返ってきた。

長野から満州へ移住。第二次大戦後、捕虜としてシベリアに抑留された A さんの存在である。A さんは、ペチカの図面を持ち帰り改良を重ね、長野でペチカをつくった。そのペチカが評判となり、ペチカが長野県で作られるようになったと言うのだ。中央アジアの旅で、シベリア抑留の日本人が建設した建物の多くに出会っていた筆者は鳥肌が立つほど感動した。

そこで、周辺で有名な腕のいいペチカを作れる職人さんを紹介してもらい、早速筆者宅に作ってもらうことにした。

意外にも?! 高性能だったペチカ

紹介してもらったのは、長野県伊那市にお住いの左官職人山口恵次郎さん。私的な感想で申し訳ないが渋さを増した山岡良介(汗!)。(東京事変ギタリスト) クールなインテリ左官屋さん。



写真は山口さん施工のペチカ(山口左官工業所 HP より引用)

山口さん曰く、ペチカは環境にも家計にも優しいんだそう。利点は主に 6 点。下にざっとまとめる。

(1) 熱効率

薪を焚いたときに出る熱をレンガの長い煙道に蓄熱保温させているので、熱効率は 90~95% と高性能。薪ストーブは 30%~50% 程度とされているので、薪の消費が薪ストーブの 1/2~1/3。

(2) 煙突掃除

煙突から排出される、煤(すす)の量 1/25~1/50 と少なく、煙突掃除もほとんど必要ない。近隣からの苦情を心配しなくてもよい。

(3) 薪の種類

針葉樹でも広葉樹でも乾燥したものなら何でも燃やせる。針葉樹は安価で入手できる

(4) 快適性

一度温まってしまうと、9~15 時間放熱が続くので、朝晩焚くだけで 24 時間いつでも暖かい。レンガからの放熱は太陽と同じ輻射熱で快適な暖かさがある。

(5) 安全性

レンガで密閉されているので火の漏れる心配がない。薪ストーブのように高温とならないため子どもやペットにも安全。

(6) 調理機能性

煮物ができるコンロや燻製も可能。

ロシアや中央アジアでみた憧れの白いペチカも

また、驚いたことに山口さんの施工写真を見せていただくと、旅先で見た懐かしい白いペチカが!!

要望があれば、現地と同じ白いペチカも作ってもらえるとのこと。そして棚をつけたりなんてことも!

なんて素晴らしい!!

筆者は大興奮である。しかし、結局はレンガ積みの美しさにはほれ込み、泣く泣く漆喰塗りは諦めた筆者。家に二つペチカが欲しい...



山口さん施工 軽井沢 T さん自邸

いいとこづくめのペチカ。コロナ禍の今だからこそ冬に向けて導入し、今年の冬はペチカでゆっくりとおうち時間を過ごしたいものである。

.....

山口左官工業所の情報はホームページでご確認ください。

→ <http://pechika.info/2013index.html>

〒396-0215 長野県伊那市高遠町小原 407-5

山口左官工業所 山口恵次郎

.....

キルギスに暮らす(2)

家庭でのゴスチとキルギスの料理

倉谷 恵子 (キルギス日本語教師ボランティア)

前回はレストランや宴会場でのゴスチを紹介したが、いつもいつも大きな貸し切り会場へ足を運ぶ訳ではない。普段のゴスチは家庭で行われる。今回は家庭でのゴスチの様子と饗される料理について紹介したい。

キルギス人は誕生日、ラマダン明け、正月、祝日などに料理を用意して頻繁に家族や友人を招く。親戚が近隣に住んでいる場合も多いので、大みそかの年越しの夜などは複数の親戚家庭を渡り歩いてご馳走を食べたりする。

ホームパーティーと言い表せるかもしれないが、ちょっと違う。予定外の客が混ざって訪れても構わないような雰囲気があり、形式ばっていない。キルギス人の家庭ではゴスチに限らず普段から家に人が出入りすることはそれほど珍しくなく、食卓の上にはいつもはちみつやパンが置かれていて、部屋に通されたら遠慮なくそれらを口にしてお茶を飲むことが習慣になっている。だからかゴスチでも招く側、招かれる側とも肩ひじを張らない。

家庭でのゴスチは、ホームステイの経験と同様に、私にとってキルギス人の生活を垣間見る絶好の機会だった。学校の食堂やレストランなど公の場だけで食事をしていたら、きっと彼らの表向きの姿しか知らなかったろう。招かれた家に足を踏み込めば、家の造りや部屋のしつらえ、家族構成、人々の平生の振舞い方が自然と目に入ってくる。本棚のある家もあればない家もあり、装飾が豪華な家もシンプルな家もある。片付けの行き届いた家も、多少散らかっていても気にしない家もある。「遊牧民だった人々」というステレオタイプの見方では判断しきれない、現在のキルギス人の生活がそこに反映されていた。

クーシャイ、クーシャイ！

キルギスの家は一戸建てでもマンションでも一般に靴を脱いで入る。しかし日本のようにはっきりした玄関スペースは設けられていない。玄関ドアの内側か外にマットが置かれていて、その周辺で靴を脱ぐ。家の内と外の区別がなんとなくあいまいだ。室内履きのスリッパが外に転がっていても、靴についた土が家の中に持ち込まれても気にしない。ゴスチの来客の数が多くて外に脱いだ靴があふれかえり、他人の靴の上を歩きながら招かれた家へ入ったこともある。



カザフスタンで食べたキクラゲたっぷりのラグマン

日常的な 3 度の食事は椅子やソファに座ってテーブルでとるが、お客を招く部屋は低い長テーブルを置いて床に座って食事をするパターンが多い。昔の日本家屋の座敷のように、多くの客に対応できるよう面積の広い客間を確保し、普段からたくさんの長座布団と長テーブルを用意しておくようだ。長座布団は重ねて並べることで来客が泊まる際の布団がわりにも使っていた。

通された客間のテーブル上には、レストランのゴスチと同様、あらかじめ果物やチョコレート、キャンディなどの駄菓子、前菜、「ナン」と呼ばれる円盤形のパンがそれぞれ大皿に盛られている。上座、下座が一応あってお客さんは年齢の高い人から順に上座に座るようだが、人数が多かったり来訪や帰宅に時間差があれば、席順も関係なく座っていた。

さて席に着くと子どもの顔が見えない。キルギスもかつてに比べれば晩婚・少子化が進んだというが、それでも依然 20 代半ばまでに結婚し 3 人以上の子どもをもうける夫婦が多い。だからゴスチに招かれる先でも、大抵は子どもが遊びまわっている姿を見かけるものだった。

その子どもたちが、食事の席にはいない。大人だけが座っている。当初は気付かなかったが、何度かゴスチに行くうちに、どの家庭でも子どもと大人は席を区別していることが分かった。子どもは別の部屋にいて、そこには小さなテーブルに取り分けられた食事や果物、おやつが置いてある。けれど行儀良く食事をしているのではなく、時々チョコレートや果物をつまんだりしながら勝手に遊んでいる。たとえ子どもの誕生日を祝う会だとしても、当の本人は客間のテーブルにはおらず、親戚のおじさんやおばさんに顔を見せたりプレゼントをもらったりするために時折、大人の前へ呼ばれる程度だ。

どの家庭でも料理は大皿にたっぷり用意するのが習慣のようで、各自が十二分に食べても料理が足りなくなることはない。銘々の皿にとった料理が食べきれなければ皆、遠慮なく皿に残しており、むしろきれいに食べきっている人の方が珍しいようだった。

言葉が分からない私は、会話で口を動かさないかわりに、もっぱら食べることで口を動かしていた。皿が空になると、前後左右に座っている人が「クーシャイ、クーシャイ（さあ食べて食べて）」、「クーシャイチェ、クーシャイチェ（食べてください、食べてください）」と言いながら、すかさず料理を入れてくれる。私が間断なく食べ続けていることは明らかなのに、それでも「クーシャイ、クーシャイ」とすすめてくるので、その通りにしていたらお腹は破裂寸前になる。

テーブルで彼らが見せるそんな振る舞いは、ほほえましく思える一方で、うれしいことばかりでもなかった。ある人がペロッと舐めたスプーンでお客さんの料理を取り分ける場面もあったし、各自が大皿から直接自分のスプーンで料理をとる姿は日常茶飯事だった。肉を両手で食べて汚れても小さな紙でささっと拭いておしまいだし、15 リットルペットボトルに直接口をつけて飲料を飲んでいる姿もあった。コロナ禍の今だから言う訳ではないが、彼らと私たちの間には衛生に対する考え方に明らかに差異がある。

皆が陽気に歓談している内容の 98% 以上は私には分からなかったが、おそらくこんな場面だろうと推測できる状況はあった。招かれた人たちが祝いの言葉を口に出している時である。キルギス語で言っている時はちんぷんかんぷんだが、ロシア語の場合は、詳細は不明でも何となく前向きな言葉を口に出しているらしいことは分かった。「私は●●さんの健康と幸福と……と……と……を願います」のように願う項目が結構長く続く。そんなに欲張って祈らなくてもと思うが、できるだけ多くのことを望むのが祝われる当人やそこに集う人々への思いやりなのだろう。

中央アジア料理の数々

では、どのような料理が振る舞われたのか。前菜はサラダなど通常 2 種類以上がテーブルに載せてあり、ナンと前菜を食べるだけでも結構にお腹が膨れるが、宴が始まってしばらくしてから出されるメインディッシュをいくつかを紹介しよう。無論、紹介するメニューのすべてが 1 度のゴスチで饗されるのではなく、この中のいくつかがテーブルにのぼるのである。

祝い事の席でよく登場する伝統料理と言えばまず「ベシパルマック」がある。大部分のキルギス人が好物としてあげる麺料理だ。「ベシ」はキルギス語で「5」、「パルマック」は指を意味し、かつては 5 本指すなわち手で食べていたことから名付けられたという。私が出合ったベシパルマックの大部分はラーメンほどの細さの麺に、具材は大抵肉と玉ねぎを使い、塩で味付けがされていた。冷えると白い脂が麺を覆い始めるので、いかに動物性脂肪が多いかが分かる。キルギス人の誰もが自国の伝統料理だと胸を張るのだが、正直に言わせてもらおうと個人的には印象が薄く、嫌いではないが積極的に食べたいとは思わなかった気がする。

麺料理で私が好きなものとしてはベシパルマックよりも「ラグマン」をあげたい。日本のうどんよりも歯ごたえのあるしこしこした麺に、肉や野菜を煮込んだトマトベースのスープがかかっているタイプと、具材と麺をともに炒めてあるタイプがある。麺を粉からこねて手作りする人が多いようで、太さが不揃いなところがかえって味わい深い。当初はうどんの外国版と見なして、さして心は引かれなかったが、カザフスタンへ行った際にキクラゲと牛肉がたっぷり入ったラグマンに出会い、その味に目覚めた。カザフスタンの旅以降、そこまで感動的なラグマンには再会していないが、ベシパルマックが出されるよりもうれしいと思う。

「マンティ」という肉まんのような料理も比較的好みである。牛肉と玉ねぎ、ニラなどの具材を細かくして水餃子の皮のような生地で丸く包み、蒸した料理。中華の点心のような感覚でつまむことができる。肉は塊を切り出して包丁やフードプロセッサーで細かくするので、日本のひき肉よりも食感が残っている。マンティよりも生地が分厚く、蒸さずに油で揚げた「ハシヤン」という料理もあり、カロリーは高いだろうに、小ぶりのものだと思えば始めるといくつでもお腹に入ってしまう。



日常的にもよく食べられる「プロフ」

米の料理もある。「プロフ」だ。ニンジンと肉、ご飯を炒めて炊き込んだもので、日本の「ピラフ」の元祖といえる。外国の米はばらばらしたイメージがあるが、そうでもない。炊き込めば水分も適度に含み、油と相性の良いニンジンの甘みも出ていて食べやすい。肉は混ぜ込まれている以外にも細かく刻んだものが上にかけてある場合や、あるいは塊がどーんと載っていることもある。具材の組み合わせにバリエーションがあっても良さそうに思うが、プロフに入る野菜は必ずニンジンと決まっているようで、玉ねぎが加わる以外は他の野菜が入っているプロフをキルギスでは見たことがない。

麺類、粉もの、米ときたら次は、じゃがいもだ。キルギスではじゃがいもを非常によく使う。たとえば台所にトマトもピーマンもキャベツもなかったとしても、じゃがいもはある。そこまで言うの大げさだが、常に食卓にのぼっているイメー

ジだ。ではキルギスのじゃがいも料理がバラエティ豊富なのかと聞かれると、どうも思い出せない。焼いたり、炒めたり、ゆでて潰したりしてあったが、際立った印象を残すほどのメニューとして登場することは少なかったように思う。

ゴスチの席で出たじゃがいもメニューを 1 つ上げるとすれば「ドゥンダマ」という料理だろうか。じゃがいもとキャベツ、ニンジン、肉、トマトなどを煮たものだ。ポトフと肉じゃがの中間のような、どこことなく懐かしく日本でも食べたことがありそうな味だった。



じゃがいもと肉、キャベツなどの野菜を煮込んだ「ドゥンダマ」

最後に、メインディッシュではないが、キルギスのお祝いや行事で欠かさず作られる食べ物をあげよう。「ボルソック」という一口サイズの揚げパンだ。小麦粉でできた生地を薄くのばし、3、4センチ四方に四角く切り、油で揚げる。ナンなどと共にかごに入れてあらかじめテーブルに盛られており、テーブルにつくと必ずと言っていいほど、近くに座っている人が手づかみで、私の皿の横にどさっと置いてくれた。そのまま食べるだけでなくジャムやはちみつなどをつけてもいい。

揚げた直後がおいしいが、こちらでは特に揚げたてが重視されることはない。来客たちが持ち帰れるように大量に作られ、持ち帰った客たちは自宅で翌日も翌々日も 3 日後も温め直すことなく、冷たく硬くなったものをおいしそうに食べている。持ち帰りの際もナンやボルソックは手づかみで袋に投入されることが多いので、食べきれずに放置しているとカビが生えてせっかくのボルソックがゴミ箱行きになってしまうので要注意だ。

食を楽しむ

以上、代表的な料理を記してみた。いずれも祝いの席に出されるだけでなく、日常的にも家庭で作られ、食堂で食べたりお店で購入することもできるポピュラーなものばかりだ。日本のように季節や行事によって変化を持たせることはほとんどないので、1 年を通してこのようなメニューを食べてい

ると考えていい。

ラグマンの紹介の際に少し触れたが、キルギスで食べられる料理の多くは周辺国でも食べられる。「キルギス料理」すなわち「中央アジア料理」であり、実はキルギスのみで食べられる料理はほとんどない。味や具材、見た目に若干の違いはあっても、ウズベキスタンやカザフスタンにも存在するメニューだ。

塩と油を基本としたシンプルな味付けなので、日本人が「ほったが落ちる」ほどの感動を覚えることはないかもしれないが、強烈な辛さやしつこさで顔をしかめることもない素朴な料理である。

ただ最近は「ドゥンダマのもと」「～のもと」のようにメニューごとに味が整えられた調味料のパックが何種類もスーパーで売られていて、それを使えば誰でも失敗のない味付けに仕上がるから、一体どこまでが手作りの味なのかは分からない。

それでもゴスチの日に女性たちが語り合いながらボルソックやラグマンを生地からこねて作り、テーブルに集った人たちは時計も気にせず食べて語らう様子を見てみると、今でも食に時間を使うことを惜しまず、楽しんでいるのだとつくづく思う。

ゴスチに集った人々の多くとは一度きりの出会いだった。だがテーブルに載せられた料理と食べている人々、彼らが集まっている家、それらすべてが相まって私にキルギス人の生活を教えてくれた。

食べることは生きること。つまり食を楽しむのは生きることを楽しむこと。そう教えてくれたキルギスの家庭でのゴスチに、心から感謝したい。

日本語教師募集！

キルギスの 11 年生学校「ビリムカナ・カント校」

キルギスの首都ビシケク郊外にある 11 年制学校「ビリムカナ・カント校」が、日本語教師を募集しています。

給料は少なく、往復旅費も自前と、ほぼボランティアの条件ですが、教師経験を積み、ロシア語もしくはキルギス語を学習するよい機会になります。

受入校；ビリムカナ・カント校（私立の 11 年制学校）

所在地；ビシケク郊外（バスで約 30 分）のカント市

授業数；1 授業 40 分×1 日 3 授業×週 5 日

給 料；月額 150 ドル

宿 舎；ホームステイまたは学校寮（1 人部屋/無料）

期間；22 年 9 月～23 年 6 月（希望により変更可）

問合せ先；JIC 東京事務所 TEL:03-3355-7294

e-mail: jictokyo@jic-web.co.jp

45年前の思い出

「プスコフ市での7カ月」

神谷 昇（大阪府在住）

1976 年 12 月から 1977 年 7 月までの 7 ヶ月間ソ連のプスコフ市に滞在していました。目的はプラント輸出に關しての技術指導です。羽田空港からモスクワに飛び、夜行列車でプスコフへ。到着したときの気温は -30°C 。まず買ったのが毛皮の帽子と厚手のゴム長靴。「毛皮の帽子を被らないと腦みそが凍ってしまうよ」と脅かされました。

バスで市内を案内してもらって驚いたのは川の氷をプール状に切り取り水着の若い女性が氷の上で準備体操をしてから



12 月に凍った川で泳ぐ女性

工場内では女性も男性と同様に足場に上ってペンキ塗りをしたりツルハシで地面を掘ったり。PM5 時になると工場から閉め出されるため残業はなし。日本人技術者約 10 名が宿舎で自炊をしていたのですが、牛肉の大きな塊を買って冷凍庫ではなく氷点下のベランダに置いておくと塊が日々小さくなっていく。カラスがつついて食べていたのでした。お米は炊く前にテーブルに広げてゴミを選別。

楽しみはたまに行くレストラン兼ダンスホール。食事をしているカップルの女性に手を差し伸べて「Можно?」と言うと、男性が「Пожалуйста!」。断られたことは一度もなし。

休日には工場の人々がスキーや魚釣りに案内してくれました。湖の上を車で進みポイントで氷に孔を開けての魚釣り。暖かくなると車の重みで氷の割れ目から水が噴き上がる。毎年何台かの車が湖底に。大衆サウナではお互いの身体を白樺の枝で叩き健康祈願。宿舎へのバスを待つ間に髪の毛は凍



2 月湖での魚釣り



プスコフのクレムリン

ってゴワゴワに。

給与はルーブル（当時 1 ルーブルは約 400 円）。日本に持ち帰ることはできないので郵便局で美しい切手を集めたり、日本の家族に電話をしたり。日本に電話をする場合、電話局で申し込みをして回線が繋がるのを待つこと約 2 時間。呼び出しがあると電話局内にある電話ボックスから通話可能。

4 月になると川の氷が一夜で砕けて轟音を響かせて流れていくのが印象的でした。馴染みの八百屋さんに行くと店主が手招きで奥へ案内してくれて今年初入荷のキュウ리를売ってくれました。5 月の大イベント、メーデーの頃には気温が $+30^{\circ}\text{C}$ 近くまで急上昇。日照時間も長くなり、終業後は宿舎近くの学生たちとバレーボールなどに興じました。休日を使ってターリン（エストニア）やレニングラード（現サンクトペテルブルグ）に行ったのも懐かしい思い出です。6 月になると夜中の 11 時頃まで薄明るい川で水遊び。州の陸上競技大会にも参加しました。7 月には工場の人たちとキャンプに行ったり、学生たちと森でキノコやイチゴ狩りをしたり。

赴任当時はほとんど話せなかったロシア語も早朝学習と現地の人への積極的な話しかけで日常会話は何とかできるようになりました。

36 年間の会社生活の中で最も思い出深い 7 ヶ月間でした。追記；

先日フェイスブックでロシア人から友達リクエスト。名前に覚えはなく、経歴を見るとプスコフ在住とのこと。もしかしてと愛称で、〇〇さん?と尋ねると「Да」。45 年前の学生でした。コロナが終息して再会できることを願っています。

* * *

《プスコフ市／Псков》

903 年に創建されたと伝えられるロシアの古都。サンクト・ペテルブルグの南西約 200km、エストニアとの国境に位置している。中世には国境貿易でロシア有数の大都市として繁栄を謳歌した。クレムリンや古い町並みが残っており、「プスコフ建築派の聖堂群」としてユネスコの世界文化遺産に登録されている。プスコフのクレムリンは、ドイツ騎士団、ポーランド軍、スウェーデン軍などに何十回も包囲されたがその度に撃退した難攻不落の城塞であったと記録されている。

＜日本ロシア学生交流会＞

30大学のメンバーが集う日露交流サークル

今年もオンラインで精力的に活動を継続しています

上原 逸人（日本ロシア学生交流会代表／華東師範大学 2 年生）

初めまして。今年度、日本ロシア学生交流会で代表を務めております華東師範大学 2 年の上原逸人と申します。今回はご案内をいただき、日ロ学生交流会の活動を寄稿させていただきます。

私たちは現在約 30 の学校から 75 人のメンバーが集まる日本最大規模の日露交流サークルです。インカレサークルという特性を生かし、学校の枠を超えた幅広い繋がりが得られることが特徴です。創立以来、長きににわたり「訪日・訪露企画」を軸とし、日露間の学生交流を図ってきました。しかし新型コロナウイルスの感染拡大により、当会の活動は大きな転換点を迎えています。

まずは当会の沿革について説明した後、主な活動内容を紹介させていただきます。

日本ロシア学生交流会の沿革

1989 年、東欧革命により現地への渡航もままならない中、ソ連に赴き現地で同世代の学生たちと直接ひざを付き合わせて語り合おうと考えた学生有志により、同年 6 月に当会の前身となる「日ソ学生交流会」が設立されました。当時はソ連に関する正確な報道も少なく絶対的な情報量が不足していましたが、得られた僅かな情報を元にして毎週のように「ソ連とは、新生ロシアとは何か」と熱い議論を交わしていました。初期の 2 年間は首都モスクワを訪問し、とにかく現地の学生との対話をしようという意気込みのもとに活動していましたが、やがてソ連・ロシア激動の時代で交流先を見つけることすら困難となりました。

そのような中、財団からの助成金が一時打ち切れ、やむなく自費でモスクワへの渡航が 2 度実施されました。格安航空券の無いこの時代に「学生が自費で」渡航するのに必要な資金集めに際しては想像を絶する苦労があったと聞いています。しかしそれでも 1994 年、会員のカンパによって第 1 回訪日企画が敢行され、モスクワから 1 名の学生を招致することができました。

そして翌年の 1995 年はロシア第三の都市ノヴォシビルスク市の学生と新たに定期的な交流事業が開始されることとなり、当会にとって大きな転機となりました。当時顧問を務め



横浜中華街にて、ノヴォシビルスクの学生たちをみんなで案内

てくださった和田先生とフロロヴァ女史との出会いから始まる交流により、主にノヴォシビルスク国立大学東洋学部との交流を継続的に実施し、第 1 回ノヴォシビルスク訪問事業が実行されました。1996 年、97 年には日本の家庭を知ってもらうことを目的としたロシア人のホームステイ企画を本格的に始めました。

1998 年からはそれまで 2 期に渡って同年中に行っていた訪日・訪露企画について、主に財政的理由からそれぞれ隔年開催とすることとしました。1999 年には新しい試みとしてモスクワ再訪問を行い、現地の学生と交流しました。

そして 2001 年の夏より、現在も続くモスクワ郊外の町リヤザンとの交流が開始されました。95 年より続くノヴォシビルスクとの交流も現地メンバーが大きく入れ替わり、さらに活動は充実してきました。2009 年には創立 20 周年を迎え、この間に当会から広く社会で活躍する人材を多数輩出しています。

2011 年の春には大阪大学・同志社大学の学生を主な会員とし、関西本部を設立しました。この年は 1997 年を最後に途絶えていた訪日・訪露企画の同年開催を 14 年ぶりに果たす運びとなりました。2012 年は関東関西二本部体制の中で 4 都市間同時交流という試みを始めました。

2013年には外部の方々を招いての斬新かつ大規模な企画を皮切りに、北方四島学生交流企画への参加など多岐に渡って活動が実施されました。2014年では新たな試みとして、東京大学の学園祭である駒場祭での出店を行ったことで、本会の活動・ロシアのことにについて、一般の人に広く知ってもらうきっかけとなりました。2015年、16年には会員数が増加し、様々な大学から会員が集まるようになり活動に活気が生まれました。

2017年には、前年に天候不順によりやむなく中止した北方四島への訪問を果たしました。さらには、2013年度に開催された『日ロ学生シンポジウム』をロシア関連分野就職シンポジウム『ミチター』と名前を改め再開する運びとなった上に、東京大学のもう一つの文化祭である五月祭へも出店を行いました。また関西支部が「セーミチキ」と名を改め別組織として独立し、姉妹団体としての交流は現在も続けております。

2018年は、北方領土に住むロシア人とのビザ無し交流、五月祭への出店、第2回シンポジウム『ミチター』を開催しました。また新たな試みとしてロシア料理会や、カザンとの交流を目的とした「カザン班」の設立、活動を行い、2019年も同様にシンポジウム『ミチター』をはじめ、ロシア語教室、料理会、バラライカ教室などを開催しました。

2020年2月には、東京・芝公園にて日本初のロシア・ユーラシア文化祭『ブラズニク』を開催しました。著名人の方をお招きしたトークショーや、舞踏、演奏の催し物、グッズや食品の販売まで、イベント内容は多岐に渡り、多くの来場者様に喜んでいただきました。

しかし開催直後に新型コロナウイルスが世界中で猛威を振るい、予定していた訪日・訪露企画は中止に追い込まれ、活動を大幅に縮小せざるを得ない年となりました。このような状況の中でも、就職シンポジウム『ミチター』を4回目にして初となるオンライン開催に漕ぎつけました。

そして2021年度、緊急事態宣言の発出が複数回に渡り続く中、パンデミックは終息の兆しを見せません。しかし私達は全く新しい活動をしていきます。今年度より開始した月2回のオンライン日露交流会をはじめ、月の約半分を活動日にあて多岐に渡るイベントを開催し、日露間だけでなくメンバー同士の交流を絶やさず、むしろ加速させる事を目標に活動して参ります。

当会のメインイベント

○訪日・訪露企画

直接の渡航を伴う、当会の核となるイベントです。

・訪日企画

ロシア・ノヴォシビルスクから日本を訪れたロシア人学生をホームステイで受け入れ、ディスカッションやパーティーなどの交流企画を通して親睦を深めます。ディズニーランド、横浜中華街、鎌倉等を訪れ、日本語・ロシア語を使って案内をしました(冒頭の写真参照)。

・訪露企画

当会からロシア・リャザンにメンバーを派遣し、ホストファミリーと寝食をともにすることでお互いの文化を学びます。



ロシア・リャザンにて訪露交流



オンラインで開催した就職促進シンポジウム「ミチター」

初めてロシアの地を踏む機会となったメンバーが数多くいました。

○ロシア関連分野就職促進シンポジウム「ミチター」

当会メンバーをはじめ、ロシアについて関心を持つ学生の数は多く存在します。しかし多くの学生はロシアに興味を持ったにも関わらずロシアと無関係な人生を送る、学生時代に抱いた夢が夢で終わる、という現実があります。私達はこの状況を打破すべく、ロシア語に関係する職業現場の第一線にて活躍されている方をお招きし、お話を伺う就職シンポジウムを2017年より主催しています。

昨年の第4回は初のオンライン開催となり、現在もYouTubeにてアーカイブがご覧頂けます。報道、IT、企画、俳優、弁護士と幅広い分野で活躍されている方々にご登壇いただきました！

今年度も9月に第5回のオンライン開催を予定しています。詳細は当会SNSを是非ご覧下さい。

今年度の活動について

新型コロナウイルス感染症の流行により、私たちのみならずほとんどの国際交流系サークルは極めて大きな打撃を受け、活動内容を抜本的に見直す事例が相次ぎました。当会の核であった訪日・訪露企画の開催は2019年の開催を最後に中止が続き、今後数年は厳しいものと考えています。また各学校のサークル活動制限も大きく、食事会や料理会などの対面活動も大幅に減少しました。しかし核の活動を失った状況の中でもオンラインで続けられる活動を精力的にしています。

○定例会

概ね月に一度、会員同士が顔を合わせる機会として必ず開

催しています。通常時は大学に集まっていたが、現在はオンラインで開催しております。主に月次活動報告や、予定の共有、そしてお楽しみ企画も開催します。

○日露交流会

「日本ロシア学生交流会」という名称で活動しているので、最も重要な定期イベントの1つと考えています。今年度はオンライン交流会として月2回、ロシアの皆様との交流会を開催しています。当会メンバーにはロシア語を使えない者が多いので使用言語は主に日本語ですが、個人の習得状況に合わせて、ロシア語を使用する機会も用意しています。

○座談会

当会は日本とロシアだけでなく、日本人メンバー同士の交流も大切にしています。定例会は非常に多くのメンバーが出席するためお互いの顔と名前を一致させることが難しい点がありますが、5月より少人数でのイベントを設けることで、新メンバーも含めたより踏み込んだ交流を促進しています。

6月からはさらに新しい試みとして特定のテーマに内容を絞った座談会を始め、現在までに軍事、音楽、バレエなど多くのテーマで開催しました。マニア心をくすぐるものがあり、本来の予定時間を延長するほど盛り上がることも珍しくありません。



○その他

・映画鑑賞会

緊急事態宣言の解除後に集まり、日露合作映画「ハチとパルマの物語」を鑑賞しました。今年度の数少ない対面イベントとなります。

・ロシア語勉強会

現在は初心者向けのみの開催ですが、メンバーにとってロシア語の世界を知る一助になればと考えております。

・日本語授業ゲスト

ロシア各地の大学で行われる日本語のオンライン授業に、教員の方より招待を受けゲストとして参加させていただき、日本語を使って交流します。ロシア人の語学力と日本に対する思いには、同じ学生として大きな刺激を受けます。

・セーミチキ合同イベント

関西の姉妹団体「セーミチキ」と定期的に東西交流会を開いています。今までは年一回の合同合宿のみでしたが、オンラインは移動の手間がないので同じロシアに興味を持つ学生同士、現在は高い頻度で交流を図っています。

・ロシア人向け日本留学フェア

(株)テクノソリューション・北海道大学モスクワオフィス・日露学生連盟の皆様とロシア人向け日本留学フェアを開

催しました。パンデミック後を見据え、ご来場いただいた方々に日本留学の魅力を伝えさせていただきました。

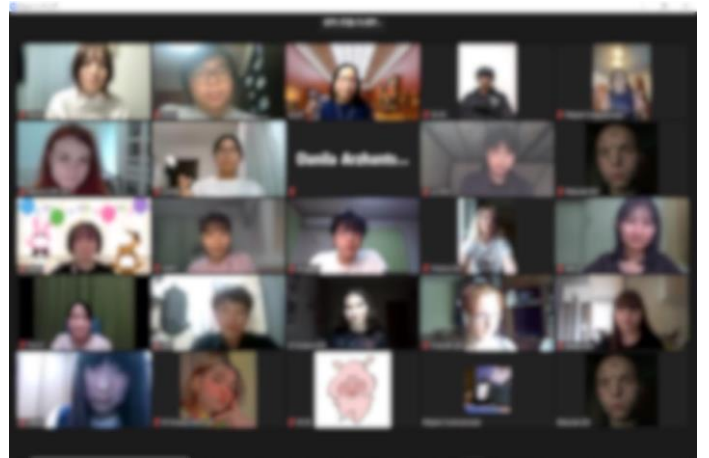
・各種ロシア大使館関連イベントへの出席

ロシア連邦文化協力庁主催の写真展オープニングセレモニーに、当会メンバーを招待いただくなど、ロシア大使館の関係者の方より定期的にお誘いをいただいています。また同時に多くの社会人や学生の方々と交流させていただき、大変貴重な機会を賜りました。

結びにかえて

当会は毎年、年間の活動を活動報告書にまとめています。その内容のほとんどは渡航が必要な「訪日・訪露企画」が占めています。しかし昨今の情勢に伴い渡航は困難を極め、この状況は今後も当面の間続くと思われます。

ここ10年で航空運賃は大幅に下落し、私達大学生にとって留学や旅行で海外へ行くことは、ごく当たり前の日常となりました。しかし今思えば「沿革」の最初にあるように、当会が設立された当初はロシアへの渡航は困難を極めました。同じように渡航が極めて厳しくなった現在、当会は改めて原点に立ち返り、その当たり前がどれほど恵まれたものだったのかを再認識する機会となったのかもしれません。



オンライン交流会

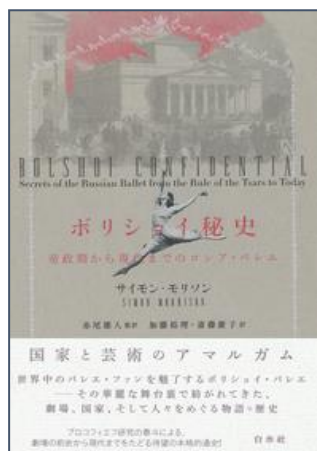
幸いにも時代が下った事で技術革新が進み、インターネットやSNSという強力な交流ツールがあります。これらを活用した今までの形とは全く違う活動をしていますので、手探りの状況が続いていることは否めません。しかし先輩方が受け継いで下さった交流の流れはこのような困難な状況においても、絶対に止めてはならないと考えています。またいつかお互いが海を越えて会える日を心待ちにしながら、今できる精一杯のことをして参ります。

お世話になっている関係各所の皆様には、今後とも何卒宜しくお願い致します。改めて今回寄稿のご案内をいただきましたJICの皆様、ありがとうございました。



本の紹介

ボリショイ秘史 帝政期から現代までのロシア・バレエ(2)



斎藤 慶子

サイモン・モリソン(著)

赤尾 雄人(監訳)

加藤 裕理(翻訳)

斎藤 慶子(翻訳)

白水社

四六判 (570 頁)

定価 6,600 円+税

■はじめに

本書の概要については、記者の一人である加藤裕理が前号に書いていますが、初めてお知らせをご覧になる方に向けて簡単に説明いたします。

本書は、18 世紀後半の草創期から現代にいたるボリショイ・バレエの歴史を、膨大な資料をもとに読み解きます。お手に取っていただいた方は、その流麗なデザインのカバーとは裏腹な本体の分厚さに驚かれるかもしれませんが、どうかそこで読むのを断念しないでください。いわゆる研究書と分類されるものにありがちなお堅い調子で綴られてはいません。ソ連の文化政策といったハード面をおさえつつも、役人やアーティスト一個人の噂話に近いようなエピソードもふんだんにもりこまれ、表舞台の美しさだけではなく、ボリショイ・バレエを形作る重層的な社会の一端に触れることができます。

著者はアメリカ人のプリンストン大学教授で、ロシアとフランスを中心とする 20 世紀音楽を専門としています。特にプロコフィエフ研究で名を馳せ、古文書調査をもとに、同作曲家の作品の復元に演出家としても取り組んでいます。本書で描かれる人物像が生々しく迫ってくるような印象を読者に与えるのは、実践家としての彼の歴史へのアプローチが影響しているのかもしれません。

今回は革命後から現代までにあたる第 5 章から終章までをご紹介します。

■ソ連から現代へ

革命後のロシアでは、すべての文化活動は政府の管理下におかれました。その締め付けの強弱は政治情勢によって変化したのですが、バレエはほかのジャンルよりも厳しく政府の指導が徹底されたようです。筆者は、主役級のダンサーをトップに据えるというバレエの階級制度が上意下達を容易にし

たと指摘しています。役人たちの日和見かつ強硬な態度に翻弄されながら、時に身を切られ血を吐くような想いをして自分の創造活動に真摯に取り組んだダンサーや作曲家たちの姿が浮かび上がってきます。

＜第 5 章＞ 革命後、バレエの中心はサンクト・ペテルブルグからモスクワのボリショイ劇場に移りました。政府内には、ボリショイ劇場閉鎖の声も高かったのですが、教育人民委員のルナチャルスキーの擁護により存続が決定されました。劇場の新総裁マリノフスカヤは、文化芸術については無知だったものの、忠実なボリシェヴィキの役人としてボリショイの再編という任務を遂行しました。しかし厳しい管理はダンサーたちとの軋轢を生み、才能ある者たちがボリショイ劇場を去る原因にもなりました。

本章の後半ではエカテリーナ・ゲリツェルというボリショイ劇場の花形ダンサーにスポットが当たります。「新しいソビエト女性」として革命を体現したバレリーナとしての芸術生活のみでなく、ボリショイ劇場ダンサーの夫チホミロフと強い結びつきを保ちつつも、外国の中将マンネルヘイムとのダブル不倫にも身を焦がすという、危険な恋愛物語が綴られます。



ライトアップされたボリショイ劇場

＜第 6 章＞ プロコフィエフ、ショスタコーヴィチ、ハチャトゥリャンという、ソ連バレエ作曲家の中でもっとも有名な 3 人による、政府からの検閲に対する三者三様の対応が描かれます。帝政時代にも芸術作品の検閲は行われていましたが、ソ連時代の検閲は、様々な職種の代表らによって微細にわたって行われたうえ、イデオロギー上の欠陥についても厳しく詮議されました。場合によっては更迭や流刑、処刑といった不条理で残酷な結果を呼び起こすこともありえました。芸術家たちにとってそれは文字通り生死にかかわる問題だったのです。著者の中心的関心が反映されている章で、それぞれの作品の制作過程詳細および関係者の運命について巧みに描き出しています。

＜第 7 章＞ ソ連を代表する名バレリーナの一人、マイヤ・プリセツカヤの芸術人生を縦軸に、ボリショイ劇場で 30 年以上

主席振付家の任についていたグリゴローヴィチの仕事の横軸に構成されています。芸術上の自由を求めて権力との闘争に果敢に身を投じたプリセツカヤと、やがて自分自身が権力側にたち「独裁者」として君臨するようになったグリゴローヴィチの対比が鮮明に描かれます。本文では、プリセツカヤによるグリゴローヴィチに対する率直な意見が紹介されることも興味を引きますが、同じく彼の芸術創造能力の枯渇を指摘する著者が記す振付活動のエピソードの数々は、逆にグリゴローヴィチもまた検閲によってその创作者としての運命を狂わされた犠牲者なのではないかという印象を与えます。

■おわりに

最後に、終章から著者の言葉を引用してこの紹介文を締めたいと思います。

「バレエは芸術の中で最も残酷でいて、最もすばらしい。それは悪魔的な競争のプロセスにおいて天使的なものを志すように人々に求める訓練＝規律であり、夢である。ポリショイにおけるそのプロセスの結末は、芸術的には驚嘆すべきものだが、個人的、肉体的には破滅的だったことが幾度となく繰り返し証明されている。それでもダンサーたちは、いまここという時空の制約から逃れる事を願いながら踊り続け、その代わりになにか永遠のものを掴み取るのだ。」

物語を忘れた外国語

黒田龍之助・著

新潮文庫

定価：605円（税込）

ロシア語教師にして、英語、フランス語、イタリア語、ウクライナ語、セルビア語、クロアチア語、チェコ語などにも通じている語学の達人にして名エッセイスト・黒田龍之助さんの著書「物語を忘れた外国語」が新潮文庫になった。

外国語能力を向上させようと思ったら、現代日本では外国語学校と検定試験を利用するようだ。「だが」、と黒田さんは言う。「検定試験漬けで会話至上主義の空虚な外国語環境に潤いを与えてくれるのは、誰が何といおうと物語しかないのだ」。

ということで、物語を原書で読む楽しみに誘ってくれるのがこの文庫本だ。文庫版書下ろしエッセイ「長い長い外国語の話」も収録し、読んでお得な税込605円。

あなたも愉快的な外国語の世界へ、どうぞ！



関西日露交流史研究センターの岩佐毅さんから「遙かなるロシア・昔々の物語」と題した一連のエッセイをいただきました。岩佐さんはソ連時代からロシア貿易に携わり、紆余曲折の後、現在も中古車部品輸出などのビジネスを続けておられます。50年以上に及ぶソ連・ロシアとの付き合いに思いを巡らせるエッセイは昔と今のロシアの姿を伝えてくれます。

以下、いくつか抜粋してご紹介します。（編集部）

《エッセイ》

「遙かなるロシア・昔々の物語」

岩佐 毅(関西日露交流史研究センター代表)

《その1》

革命、独ソ戦、ソ連崩壊を 乗り越えたロシア人の底力

ウラジオストクからバス4時間で綏芬河に買物ツアー

ウラジオストクからバスで2時間ほど北上し、ウスリースク市を越え、さらにしばらく行くとグロデコボという国境の町に到着する。バスか鉄道で中露国境を越えると中国黒龍江省綏芬河（スイフンヘ）というロシア人観光客がショッピングや休養に多数訪れる賑やかな町がある。この町の商店はど派手なロシア語の看板を掲げ、中国語訛りのロシア語を流暢にしゃべる店員が身振り手振りでロシア人観光客やビジネスマンのお相手をしてくれる。

旧ソ連崩壊直前のペレストロイカが始まると、ロシアではゴルバチョフの英断で、個人でも自由にビジネスに従事できる体制に社会が急遽に変化し、雪崩を打ってロシア人たちがこの綏芬河に押し寄せ始めた。猫も杓子もと続々と繰り出して、ありとあらゆる消費物資や繊維製品を買い込んで、ロシアに担ぎ込んでのぼろもうけが始まった。

ウスリースクに住む知人の在日朝鮮民族のおばさんは、中国で子供の勉強机1個分くらいの量の商品を買ってロシアで販売すれば、翌日車一台買えた時期があると得意げに話してくれた。

イスタンブールに大挙担ぎ屋ロシア人 日本には中古車買いつけの大部隊

その頃私はトルコのイスタンブール経由で客船に飛び乗って黒海を一夜で横断し、主要取引先であった黒海船舶公団本社所在地のオデッサに向かったことがある。初めてのイスタンブール市内観光の際、埃が舞いあがる原っぱに数台のバスが停車し、その周りで多数のロシア人担ぎ屋がトルコ人の開いた臨時の露店で大量の繊維製品などの消費

物資をにぎやかに買い付けている凄まじい光景に出くわした。

ちょうど同じ頃、ありとあらゆる方法で日本海を横断して来日し、主として日本海沿岸の各港周辺で日本製中古車を爆買いする多数のロシア人ビジネスマンが見受けられた。ウラジオストク～伏木（富山県高岡市）間には週一便フェリー型客船ルーシ号がピストン航海しており、毎回200人以上のビジネスマンを運び、買い付けた中古車をてんこ盛りに満載して帰国していた。

当時のロシアの貨物船は通常船員20-30名ほどの定員であったが、何故かほとんどの木材輸送の貨物船などに、やはり正規の船員手帳を入手した“隠れ船員”が必ず10数名追加乗船していた。彼らは要するに船員がビザなしで入出国できる制度を利用しての中古車買い付けツアーの“ビジネスマン”の皆さんであった。こうして日本から海外に輸出される中古車約110万台の半分以上がロシアに輸出されていた時期がある。

当時最大のロシア向け中古車マーケットがあったのは富山県で、高岡市から富山市に向かう国道8号線沿いに、200店を超す中古車展示場が軒を並べてロシア向け車両を各店百台以上展示して大展開していた。

それらの店では、すべて看板はロシア語で表示され、商談も片言のロシア語であったが、経営者はほとんどパキスタン人、バングラディッシュ人などイスラム圏の人々であった。近所に100人は座れるイスラム教の祈祷場所（モスク）が開設されており、私も誘われて礼拝に参加し、長い説教を聞き、手掴みでピラフをいただいたことがある。

その後、しばらくするとすっかり資金を貯めこんだ“新ロシア”人たちが、懐に数百万円の札束や旅行小切手をねじ込んで、短期滞在の正規のビザを取得して続々来日し始めた。彼らは各地のオークション会場で中古車を買いきり、車両運搬船（ローロー船）多数がロシア向け中古自動車を満載して日本各地の港からウラジオストクに向けて連日出港して行った。その結果、合計1800万台もの日本製中古車が極東ロシアからシベリア各地は勿論のこと、黒海沿岸のクラスノダールなどにも続々運ばれて、全土を席卷した。

第二次世界大戦の犠牲者2700万人を乗り越え、再起のロシア

とにかくロシア人は粘り強く逞しい。700万人もの犠牲者を出した4年に渡るロシア革命の内戦を耐え抜き、革命後の大飢饉を乗り越え、ソ連崩壊の大混乱を潜り抜け、あらゆる艱難辛苦を笑い飛ばして生き続けるしぶとい民族である。

第二次世界大戦では数百万のドイツ軍機甲化部隊に攻め込まれ、2700万人もの犠牲者を出し（ちなみに日本の戦病死、原爆、空襲などの死者は合計約320万人）、主要な町々をナチス・ドイツに徹底的に破壊、占領された各地では、娘たちは凌辱され、友人や肉親を虐殺されている。

それでもありとあらゆる困難を乗り越え、老いも若きも国民すべてが一致団結して粘りに粘り、ついに500万のドイツ軍将兵を捕虜にし、渾身の力を振り絞って戦線をドイツまで数千キロ押し返した。そして、ベルリンに先陣を切って一番乗りし、国会議事堂上に勝利の赤旗を高らかに翻した。

実に偉大な国民ではないかと思う、今日この頃です。

（2021年4月18日）

《その2》

ロシア製自動車は“走る棺桶”？

ソ連崩壊後、ロシアは別の国に様変わり

レーニン指導の下に、社会主義、共産主義の理想を追い求めた実験国家ソ連は、建国後約70年を経過して、次第に経済が行き詰まり、ゴルバチョフのペレストロイカを経て、1991年12月に突然崩壊し、その後、連邦を構成していた各共和国も独立し、現在ロシアは全く別の国に生まれ変わっている。

旧ソ連時代、市民は全員身分証明書となる国内用パスポートの所持が義務づけられており、鉄道切符、航空券購入、ホテル宿泊時のチェックインなどあらゆる社会生活上でパスポートは必携であった。ところが、一部の者を除き、海外渡航用のパスポートの所持は許可されず、来訪する外国人と会話するのも遠慮がちであった。その後、1991年にソ連が崩壊し、市民は海外渡航用パスポートの所持を許され、外国への渡航も自由にできる「普通の国」となり海外旅行も一大ブームとなり、世界各地にロシア人観光客が目立ち始めている。

さらに大きな変化の一つは、ソ連時代には、例えばナホトカ港湾局の従業員5千人の組織に毎年配給される国産車は5台のみであり、乗用車所有は市民の“夢のまた夢”であった。ソ連崩壊後は一般市民が自由に乗用車を輸入したり、購入所有できるようになった。

トヨタ、日産など外国資本の新車製造メーカーが次々と工場を建設して開業した。大量の中古自動車が輸入販売されたウラジオストクでは、日本車が90%以上、韓国車とヨーロッパメーカーの車が少々といった風で、時折見かけるロシア製車両は武骨なカマスの大型トラックのみと言っても過言ではない。

プーチン大統領ご推奨のロシア製自動車は“走る棺桶”

ロシア人に「プーチン大統領がモデルチェンジしたロシア製の車を買うようにテレビで大掛かりな宣伝をしています」と聞くと、運転手さんは顔をしかめて、「ロシア製の“走る棺桶”にはとても乗れない」とつれない返事である。ある日ウラジオストクでタクシーに乗るとハイブリッドのプリウスであり、周りを見渡してもほとんどすべてのタクシーがプリウスに代わっており、運転手さんは料金表示を自動的に行うスマホ片手に意気揚々と顧客を運んでいる。

そこで、私は「プリウスはどうですか？」と質問すると、運転手さんは「とてもよく走りますよ、でも、私はこの車はどこか病気で調子が悪いのではないかと毎日心配しているのです」と言うではないか。「どうしてですか？」と尋ねると、運転手さんは「とにかくこの車は食欲が全くなくて、まるで病気にでも罹っているかのように、ガソリンを全然食べてくれないのですよ。」と言ってニヤリとウインクした。

翌日乗車したタクシーは韓国製のキアであった。同じ質問を運転手さんにすると、彼は「よく走る車で気にいっています。でも、とにかく大飯食らいで、ガソリンを食べて、食べて、要するに燃費がとても悪いので困っています。」と言う。

外観は同じような形をしていても、性能の違いが歴然としており、彼らは日本車を”ヤポンカ”＝日本娘と愛おしそうに呼んで、どこまでも恋焦がれているのである。(2021年4月18日)

《その3》

ロシアは腐っても鯛のビジネスパートナー

ソ連崩壊でまさかの倒産

今から遙か26年前、まさかのソ連崩壊の影響を受けて倒産、一瞬にしてすべてを失い茫然自失となった。その後、数年間の臥薪嘗胆の時を経て、小貿易会社を再度立ち上げた。しばらく順調に推移し、ロシア、カザフスタン向けに中古自動車を年間600台、総額5億円ほど輸出し、順調に復活の道を歩んでいた。

しかし、カザフでは2007年大統領の「鶴の一声」で右ハンドル車が全面輸入禁止となり、次いでロシア政府もそれに追随しようとし、再び経営の危機に瀕した。その頃ロシアの全国50の都市で、政府の強硬な日本製中古車輸入規制策導入に対する抗議行動が大きく盛り上がりを見せた。とりわけロシア向け日本製中古車輸入の窓口として発展し、多数の関連産業がひしめくウラジオストクでの抗議活動はことのほか激しく展開された。

ウラジオストクでは市民が1500台の日本車を連ねて連日デモ行進を展開し、プーチンの強硬策に反対の意思表示を行い、日の丸の旗を掲げて行進する若者たちのグループさえもいた。

中古車輸入規制に大きく広がる反対運動

市民たちの抗議活動に危機感を募らせた政府当局は、スペツナッツ（覆面姿で特殊棍棒を手にしたデモ鎮圧機動隊）を急遽モスクワから航空機で呼び寄せた。彼らは平和的な行進を展開し民意を表現する市民に警棒を乱打し、男も女も蹴散らした。

人口1億5千万人のロシアでは年間300万台自動車の潜在的購買需要があるが、自国の自動車産業は未熟で品質も劣り、年間数十万台の生産能力しかない。市民たちは自国生産の乗用車を「走る棺桶」と嘲笑し、「プーチン大統領はベンツではなく、ボルガに乗るべきだ」と皮肉り、安価で良質な日本製中古車を買求めて、より快適な生活を楽しもうとしている。

しかし、警棒で反対運動を鎮圧したプーチン政権は、関税制度の大幅改変を行い、中古車輸入規制を強行し、日本製中古車輸入台数は年間約50万台から突然十分の一以下の4万台に急減した。

といった訳で、多数のロシア向け中古車輸出業者が倒産し、弊社も影響をまろに受けて経営不振に陥り、リストラを余儀なくされ、再度私一人の寂しい事務所となった。

方針転換し、アフリカ、中南米などに中古車輸出

そこで急遽方針を変えて、アフリカ、中南米など向けに中古車の輸出を試み始めた。しかし、何回も交渉を繰り返した末に成約して輸出できたのは、安価な車を月間数台程度で、

利益も薄く、全く将来性に欠けるビジネスであった。

その頃、フィリピンのミンダナオ島の会社から「スズキ・キャリーを大量買い付け希望」というオファーが舞い込み、商談のため心を弾ませてマニラに降り立った。

マニラは大会で、街中で車が渋滞しており、排気ガスが充満する車列の中を、子供たちが裸足でビニール袋を手に声を枯らしてミネラルウォーターを販売して回っている。ホテルを一步出ると、髭面の男が駆け寄り、腕をつかんで離さない。手にはあどけない少女の写真数枚が握られていて、「プリティーガール、30ドルダヨ」と叫びながら付きまとう。ようやく腕を振りほどいて人混みの中を行くと、完全武装の兵士数名がヘルメット姿に自動小銃を構えて展開している。私は「テロか」と胸が高鳴り周りを見るが、市民たちは平然としている。通行人に「何事ですか？」と聞くと「現金輸送車です」と言うのではない。すると、白い装甲車のような勇ましい車両が目前に止まり、兵士たちが自動小銃を構えて鋭い目を光らせて警戒し始めた。いかに治安が悪いのである。

私の宿泊ホテル前に豪華ホテルが聳えていたので、ある朝朝食に出かけてみた。食堂は豪華絢爛で、世界の珍味、ご馳走が延々と並び、大満足の朝食であったが、約4千円と割高で驚いた。現地事情に詳しい人に聞くと、当時フィリピンでは男性の月給が5千円、殺人は3千円から請け負う人があるという国である。まさに聞きしに勝る貧富の差の大きさを目のあたりにして愕然とした。

そして、ミンダナオ島の顧客がお土産の蜜柑を手に現れ、商談が無事成立し、私は帰国の途についた。ホテルから空港までの途中の川沿いには、豚小屋並みの不潔な貧民窟が延々と続いており、この国の闇の深さを感じた。そして、帰国後1週間激しい下痢に襲われ、現地事情に詳しい友人に「水道の水で歯磨きし、顔を洗った」というと、「それは絶対ダメです」、「必ずミネラルウォーターを使用してください」と注意され驚いた。

その後しばらくすると、ミンダナオ島から顧客が来日して共同事業がスタートした。ところが、「中古のランドクルーザー（税関当局への賄賂）を密輸出してほしい。」などと怪しげなことを言い出し、危険を感じて結局取引を停止した。

「昔取った杵柄」でロシア・ビジネスに復帰

といった訳で、慣れない国々との貿易をあきらめ、「昔取った杵柄」で、再度ロシアとのビジネスに回帰することにした。

その頃タイミングよく、日本各地の車両解体工場から定期的に中古自動車部品を買い付けるので、それらの船積代理店の仕事を依頼したいというロシアの顧客が現れ、早速取り組むことにした。その後、この新規ビジネスは順調に推移し、現在毎月数本のコンテナによるロシア各地への出荷を継続し、ビジネスを軌道に乗せた。また、ロシア人スタッフ2名も雇用し、日露共同での事業も順調に推移している。

今までロシアの顧客先との「トラブルが皆無だった」と言えば嘘になる。しかし、大きな問題は発生しておらず、やはりおおらかなロシアは「腐っても鯛」の魅力あるビジネスパートナーであると思いつく今日この頃である。(2021年5月5日)

5月22日にオンライン開催された守屋愛先生の講演「ロシア映画の魅力」の講演録です。ロシア映画をめぐる最近の動向や、これからを担う若手監督などについて、興味深いお話を聞くことができました(3頁に関連記事)。

大阪日口協会 オンライン講演会&映画会/2021年5月22日

「ロシア映画の魅力」～芽吹く若い力



守屋 愛 (早稲田大学、慶應義塾大学、お茶の水女子大学 ロシア語講師)

ロシア映画の世界は非常に広い世界です。私はその氷山の一角を知っているというぐらいのものですけれども、今日は私なりに「ロシア映画の魅力」についてお話したいと思います。

まずは自己紹介させていただきます。

私は2018年と2019年に行われた「ロシア映画祭in東京」で上映された映画作品のいくつかと、最近ではアレクセイ・ゲルマン JR 監督の「ドヴラートフ レニングラードの作家たち」(2018年作)、そしてウクライナのセルゲイ・ロズニツァ監督の「群衆三部作」と言われるドキュメンタリー作品のうちスターリンの葬儀を扱った「国葬」(2019年作)と1930年代の見せしめ裁判を描いた「粛清裁判」(2018年作)の日本語字幕を担当させていただきました。

字幕翻訳以外では、ほとんどの時間を大学の授業に費やしています。早稲田大学と慶應義塾大学、お茶の水女子大学でロシア語の講義をしています。さらに、現在はグゼリ・ヤーヒナという現代ロシア作家の「ズレイハは目を開ける」という小説の翻訳をしています。これはもう30か国語くらいに翻訳されている有名な小説です。諸事情あって日本での出版が遅れていますが、もう間もなく刊行される予定です。

翻訳家は制作サイドの一員

つい2か月ほど前に、ロズニツァ監督の「群衆三部作」の横浜での公開を記念してトークショーをさせていただきました。私は翻訳家ですから、この映画のロシア語の部分がどんなに素晴らしいか、スターリンの葬儀の時に語られるロシア語がどんなに詩的かという話をさせていただいたのですが、その帰りにロビーでお客様たちと自由に歓談する機会がありまして、ある方から「映画の評価については何もお話しになりませんでしたね」と言われました。そこで私は我ながらはっとしました。批評家だったら普通は「この作品は体制を批判している」とか、「この作品はこういう問題を抉り出している」とか言うものですが、私は批評家ではなく翻訳家なので、翻訳をしているときには私は完全に制作サイドの立

場に立って、どういう事を伝えたいのかということを一生涯命考えます。小説を翻訳する時も作家の分身になった気持ちで翻訳しています。つまり私自身は映画を評価する側ではなくて、制作サイドの一員として、字幕を完成させた後は観客の皆さんの評価を待つ側の人間だと思っています。

「あなたが感じた通りでいいのです」

この仕事をしていると、とても幸運なことに、何人もの映画監督とお話しさせていただいたり、インタビューをさせていただく機会がありました。監督と映画について語る時は、今度は私は一観客となって「監督の作品はこうでしたね」、「こんな風に感じました」といったざっくりばらんな感想を言わせていただくこともあります。その時にロシアの監督たちに共通するのは、「あなたが私の映画を見てそう感じたなら、それでいいのです」という言葉です。もしかしたらこれはロシアだけでなく日本の監督やアメリカの監督もそうなのかも知れませんが、私はロシアの監督としか親しくお話したことがありませんので限定つきですが、私の経験ではロシアの監督からこういう言葉をよく聞きます。

実は「ロシア映画祭in東京」の仕事をしていた時に、映画制作の勉強をし始めた娘と、一緒に私が字幕をつけた作品を見ていて、鑑賞後の意見が合わなかったことがありました。それを監督本人にぶつけてみて、「実は娘と一緒に見たのですが、私と娘の意見はこういう点で合わなかったんです」と言ったことがあります。後でご紹介するエゴール・サリニコフという若い監督でしたが、それを聞いた監督がやはり「あなたがそう思ったならそれでいいし、娘さんが思ったことも正しいのです。どう感じるかは見た人の自由です」と仰ったのがすごく印象的でした。

ですから、今日は小むずかしい話は抜きにして、私は翻訳家という、皆さんに映画を提供する立場から、なにしろロシア映画は面白いのだ、見ないと損なのだという宣伝に徹したいと思います。

ソ連崩壊後の混乱から復活を遂げた ロシア映画

それでは本題に入りましょう。今世紀に入ってからロシア映画、あるいはロシア映画を取り巻く状況はどうなっているのか、という全般的な話から始めたいと思います。

資料は、キノポискというロシア最大の映画関連サイトから引用させていたものです。

グラフは2001年から2015年までのロシア映画の公開本数です。ソ連崩壊直後の1990年代には、ロシア国内は経済・産業ともに混乱を極めていました。混乱は映画産業にも深刻なダメージを与えました。しかし、2000年代になって経済が安定してくると、映画産業も劇的な復活を遂げます。2001年は70本だった公開本数が、その後多少の増減はあるものの、全体として増加の一途を辿っています。

2015年には252本ですから、15年間で3.5倍に増えているということです。

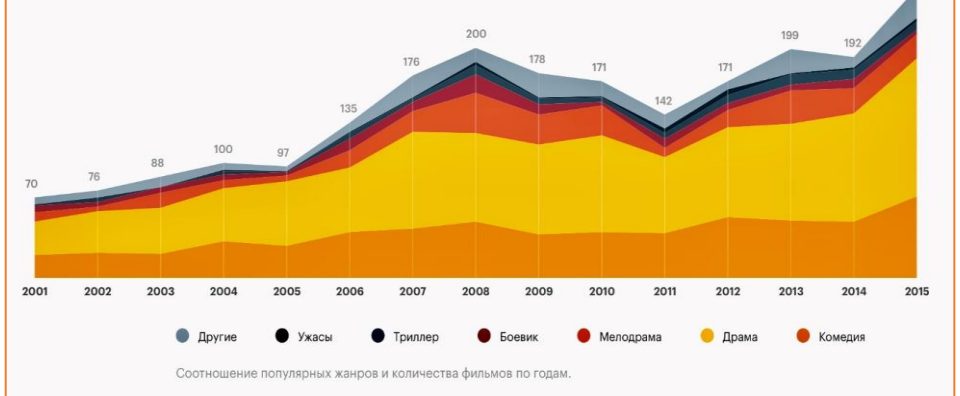
このグラフの数字は映画だけの公開本数ですが、映画産業全体で言えばもっと多くなります。というのは、ロシアではテレビドラマのシリーズなども映画監督が手掛けているのです。そのあたりの事情は日本とはかなり違うのですが、私の知り合いの映画監督もロシアのチャンネル1と契約を結んでいて、「テレビ局からたくさん注文を受けている。劇場で上映する映画の他にテレビシリーズも作る」という話をしていました。私はロシアのテレビシリーズの世界も大好きなのですが、今日は映画の話に絞っていきます。ただ、ロシアの映画監督に、一般的な映画、つまり2時間か3時間くらいの映画作品と、連続ドラマのようなテレビドラマというのは、監督にとってどんな違いがありますかと聞いたことがあります。すると答えは「それはただのフォーマットの違いで、仕事としては同じように向き合っています」というものでした。そこは日本の映画とドラマの在り方とは違う気がしました。

さらに、テレビシリーズもすごい勢いで増えてきているので、キノポиск社によると2000年から2015年に作られたロシアの映画、TVドラマを全部見るためには24時間ぶっ通しで5か月間見続けなければいけないということです。エルミタージュ美術館の作品も全部見るのに何年かかると言いますが、同様に映像作品においてもロシア人の創作エネルギーはすごいものだなと感じます。

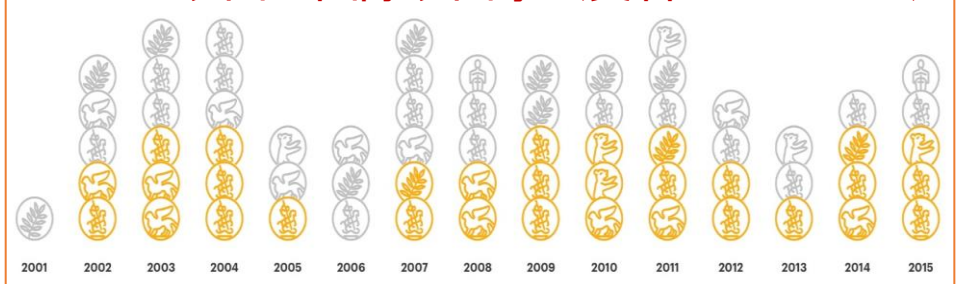
日本で公開されるロシア映画はごく一部

日本で日本語字幕なり吹替なりがついて公開されるロシ

ロシア映画の動向（2000-2015年）



ロシア映画と国際映画祭（資料 2000-2015）



ア映画の数は、ロシアで制作されている映画の総数からすると、残念ながら極々一部だと言わざるをえません。

日本で一般に公開されやすいロシア映画の傾向というのがあります。それは何かというと、まずは国際的な評価を得た作品。簡単に言えば、カンヌ、ベルリン、ベネツィアなどの国際映画祭で賞を獲得した作品です。

面白い資料があります。国際映画祭で受賞したロシア映画の一覧表です。羽がついたライオンはベネツィア映画祭の金獅子賞、葉っぱの形はカンヌ映画祭のパルムドール賞です。熊の恰好をしたマークはベルリン映画祭の金熊賞と銀熊賞。もう一つ何の形かよく分からないのですが帆船みたいなのはモスクワ映画祭のグランプリです。「4大国際映画祭」ということでモスクワ国際映画祭も入っていますが、見ての通りモスクワ国際映画祭というのはロシア映画にとっては取りやすい賞です。

その点、ベルリン映画祭、カンヌ映画祭、ベネツィア映画祭は他国の視点からの評価となりますが、これについて、キノポиск社の論文では、「西側の賞はロシア映画に体制の批判を求めているようだ。どこかに体制批判の言説が入っている映画が賞を取りやすい傾向にある」と、多少批判めいたことが書いています。その傾向はあると私も思います。

特に旧西側の3大映画祭について言うと、好まれるロシア人監督が二人います。一人はアレクサンドル・ソクーロフ監督、もう一人はアンドレイ・ズビャギンツェフ監督。彼らの作品が賞を取ることが多いのです。ちなみに、この資料は2015年までのもので、銀色がノミネートされたもの、金色が

受賞をしたものです。

国際映画祭では「体制批判的な」作品が評価されやすい

では最近はどうなっているかというと、まずアンドレイ・ズビャギンツェフ監督の「ラブレス」(Нелюбовь/2017年作)という作品が2017年にカンヌ国際映画祭の審査員特別賞を受賞しています。ズビャギンツェフ監督は、そのデビュー作「父、帰る」(Возвращение/2003年作)でベネツィア国際映画祭・金獅子賞を取った直後に、私はまだ大学院生だったのですが、私たちの研究室に来て特別講義をしてくださったことがありました。

「ラブレス」は日本でも公開されました。皆さんご覧になった方もいらっしゃると思いますが、父親と母親が離婚して家を売ることになった。その息子が邪魔者扱いされて居場所を無くしてしまった…。見てない方にはすみませんが、話さないといけないので結末を言わせていただきます。最後に息子は亡くなってしまうのですが、母親は何事もなかったかのように家の中のランニングマシンで走る。で、その走っている横でテレビがドンバスの悲惨な戦場の状況を伝えている。

この結末に来て、ああと腑に落ちるのです。「これを言いたかったのか」、「このアレゴリー(隠喩)だったのか」と、最後に監督の言わんとすることが伝わって納得するのです。つまり、ソ連時代にロシアとウクライナの関係が上手くいっていた時は、ドンバスが取り残されることはなかった。けれども、結局その両国が愛情を失って、仲違いをしてしまっ、捨てられた子供のような存在になっているのがドンバスという地域なのです。確かにキノポイスク社の指摘どおり、体制批判を含めて社会問題を抉り出した作品です。

ソ連の影を引きずる最近の受賞作品

最近私が日本語字幕を担当させていただいた2つの作品も国際映画祭に関連した作品です。アレクサンドル・ゲルマンJR監督の「ドヴラートフ レニングラードの作家たち」。これはベルリン国際映画祭で銀熊賞(芸術貢献賞)を取っています。この映画は、ちょっとセピア色っぽい、全体が大理石のような色合いの映画なのですが、おそらく、そのあたりが評価されて芸術貢献賞を取っています。

もう一つ、最近NHKのニュースウォッチナインでも取り上げられたロズニツァ監督の「群衆三部作」は、ベネツィア国際映画祭の正式出品作品でした。日本でも昨年末に公開されたばかりです。

さらに、昨年夏のカンヌ国際映画祭でサウンドトラック賞を受賞したキリル・セブレネニコフ監督の「レト」(Лето/2019年作)があります。1980年代前半のソ連の伝説的バンド「キノ」のヴォーカルに、ヴィクトル・ツォイというロック歌手がいました。彼を取りまくひと夏のドラマを描いた作品です。レトというのはロシア語で「夏」のことですが、これも日本で公開されました。

また、今年3月にはイリヤ・フルジャノフスキー監督の「DAU. ナターシャ」(2020年作)が公開されました。私は仕事が忙しくて残念ながら見に行く暇がなかったのですが、これもすごい作品だそうで、ソ連時代を再現した町を作り、出演者に長期間ソ連時代と同じ暮らしをしてもらって撮った映画で、衝撃的な作品ということです。この作品もベルリン国際映画祭で銀熊賞(芸術貢献賞)を受賞しています。

こういった国際映画祭の受賞作品が日本で公開されて、「ドヴラートフ」や「ラブレス」はDVDにもなって発売されています。このあたりの作品が正統派の現代ロシア映画ということになります。これらに共通しているのは、どれも内容にソ連時代を引きずっているということです。ある年齢以上の監督では、やはり「ソ連であった過去」が自分たちのアイデンティティの核をなし、映画製作上でも重要な鍵となっていると言えます。

「ロシア映画の境界線」の曖昧化

ちょっとわき道にそれますが、ここまで私は「ロシア映画」、「ロシア映画」と言ってきましたが、実は今、このロシア映画の境界線はとても曖昧になってきていると思います。

ロシア映画とは何でしょう？制作国がロシアと言ってしまえばそれまでですが、例えばセルゲイ・ロズニツァ監督の作品「国葬」は、ソ連の指導者スターリンの国葬を描いたドキュメンタリー作品です。しかし、出品国としてはリトアニアとオランダです。ロズニツァ監督はベラルーシで生れウクライナで育ち、今はベルリンで暮らしています。映画の内容はソ連国内でスターリンの死を悼む人々、群衆です。スターリンの死を悼む美しい言葉もすべてロシア語です。これがロシア映画とは言えないのか、それとも言えるのか、これは難しい問題です。

今、東京の有楽町やいくつかの映画館で、「キン・ザ・ザ」という昔のソ連のSF映画をリバイバル公開しています。10年ほど前に同じ監督がアニメ化した作品も一緒に上映しています。オリジナルは1986年作、ソ連時代の作品です。ソ連時代はソ連映画とすればいいわけですが、「キン・ザ・ザ」の監督はゲオルギー・ダネリアというグルジア人です。では、現代ではロシア映画といえるのでしょうか？ロシア語で描かれた映画は、私たち日本人からするとすべてロシア映画のように思えますが、ロシア映画の境界線は曖昧になってきています。今は合作映画もたくさんあります。合作映画の増加も、この「どこの映画？」という境界線の曖昧化に拍車をかけています。

アメリカ経由で入って来るロシア映画も

最近、ロシア映画とハリウッドがタッグを組んで大掛かりな作品を作るケースが増えてきました。ハリウッドと組むと、20世紀フォックスとかディズニーといった大手映画会社

が入るので、日本にも配給されやすい傾向があります。例えば「提督の艦隊」、「ナイトウォッチ」、「アンナ・カレーニナ」といった作品がアメリカ経由で入ってきています。ロシア映画が日本語付きで日本で見られるのはとても嬉しいことですが、残念ながらその反面、英語からの重訳が入ってくることも多くなってきました。動画配信サービスのNetflixなどでは、このパターンが多いようです。Netflixでロシア映画がいくつか配信されていますが、どう考えても英語からの重訳だと思われるものも増えてきています。エカテリーナがキャサリンと訳されていたりすると、てきめんにわかります。

重訳だと、折角のニュアンスが伝わらなくて残念なことも多々あります。ロシアのオリジナルを見て楽しんだ後にハリウッド経由で入ってきたものを見ると、かなり編集し直されていて、楽しいシーンが切り落とされて短くされている。これはおそらくアメリカ的な考えだと思います。短くコンパクトにして、面白いところだけ詰め込んで売るという発想です。確かに手ごねな時間で鑑賞できてしまえるわけですが、私のようなロシア大好き人間からすると、細かくて長いところが面白いのに、アメリカ風に切り落とされてしまっただけは魅力半減に思えます。

ただし、動画配信サイトのおかげで、先ほど紹介したいいわゆる正統派のロシア映画だけでなく、多くの娯楽作品、アクション映画、SF映画、コメディ作品とかいったものも、頻繁に見ることができるようになってきました。ロシア映画のいろいろなジャンルを楽しめるというのは良い傾向です。

現代ロシア映画を紹介する「ロシア映画祭in東京」

JICさん（国際親善交流センター）と一緒に開催した「ロシア映画祭in東京」のお話をさせていただきます。

これは、ロシア文化省の主催で、God Kino社というモスクワの会社が委託を受けて、日本側ではJICさんが協力して東京で行われている映画祭です。2017年から始まって、2018年、2019年と順調に積み重ねてきたわけですが、残念ながら去年はコロナの影響でなくなってしまいました。ロシア文化省は映画制作に補助金を出すだけではなく、世界各地で映画のプロモーションにも力を入れているようです。中国、韓国、タイなどの国々でも、日本で公開されていないロシア映画が公開されていて、羨ましく思うことがあります。God Kino社も日本のみならずブラジルや中国などでもロシア映画祭を開催しています。

最新のロシア映画を日本で紹介するというのが「ロシア映画祭in東京」の基本コンセプトです。映画を無料で公開するだけではなく、上映作品の制作陣も来日し、会場で観衆と制作陣が意見交換もできます。私にとっては映画監督たちと直にお話しができる素晴らしいひと時でした。3回目の2019年には特別企画で現代ロシア映画に関するシンポジウムが開

かれ、私もパネリストとして参加して、現代ロシア映画について語り合う貴重な機会を得ました。

「ソ連の影がない」若手監督たちの作品

次に、日本でなかなか紹介されにくい若手監督の映画作品について少しお話ししたいと思います。

国際映画祭で賞を取るような監督たちは、年配のベテラン勢が多いわけですが、「ロシア映画祭in東京」では、これから活躍が期待される若手監督の作品も楽しめるのが良いところです。若手監督とベテラン監督との大きな違いはどこか？ベテラン勢の作品はソ連という重い過去を背負っています。国際映画祭で受賞した「レット」「ダウ・ナターシャ」「ドヴラートフ」「国葬」「粛清裁判」...、これらの作品はどれも「ソ連であった過去」を背負っています。「ラブレス」もやっぱり昔のソ連の存在というものがあって、ソ連の歴史とつながった宿命的な現在があるわけです。



ところが「ロシア映画祭in東京」で上映された若い監督は、例えば2018年に来日したオレグ・アゲイチェフ監督ですが、この方はまだ30代です。彼が作った映画「ドミニカ」は不思議な作品で、主人公は現代ロシアのエリート男性です。建設会社で設計者として働いているのですが、仕事にストレスを感じている。ある時怒りを爆発させると、ちっちゃな女の子が現れる。で、怒りを爆発させる度にその子が少女になり、若い女性になり、大人の女性になっていく、...。女性はどうして歳をとっていく。最後どうなるかというのは想像がつくと思います。そういうお話です。

2019年に来日したエゴール・サリニコフ監督も若い監督で、「目を閉じれば見える」という映画を作りました。これは、孤児院で育った跳ね返りな女の子オーリヤが、孤児院の暮らしに耐えかねて旅に出る。「鶴の入り江」という本当にあるのかどうか分からないパラダイスを夢見て、孤児院を飛び出すのです。一緒に旅をするのがサングラスの男の子。目が見え

ないのですが、彼は新興財閥の御曹司です。お金持ちの親にいつもいつも大切にされていたけれど、何となく鬱屈したものを持っていて、たまたまオーリヤと出会って一緒に無謀な旅に出る、...

この若い監督たちの作品にはどちらも「ソ連の過去」の気配は全くありません。新しいロシアの世界だけ。ソ連とは切り離された新しい世界の作品のようです。



アゲイチェフ監督



サリニコフ監督

笑いとともにある切ない思い

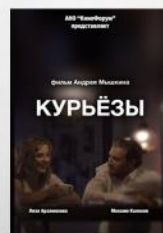
とはいえ、それでも私はこの二つの作品をとってもロシア的だと感じます。どうしてかと言うと、この二作品はそれぞれの監督がジャンルとしてはコメディだと定義しています。確かに笑えるところが山ほどあるし、コメディなのですが、同時に、笑いとともに悲しかったり、切なかったりする。コメディなのに、どちらも悲しい結末です。私はこの笑いとともに湧きあがる、悲しい、切ない思いがあること、そして、それでも笑うというところに、とてもロシアらしさを感じるのです。

私はもともとロシア文学の研究者です。ロシア文学にまつわる有名な言説に、フランスの批評家がゴーゴリという作家を評して「ロシア文学はゴーゴリの『外套』から始まっている」と言ったものがあります。そのゴーゴリが自らを語った話で、これは『検察官』という喜劇を書いた際のゴーゴリの手記にある言葉ですが、「私は悪いことをまとめて笑い飛ばすことにしました。涙を通しての笑いです」と書いています。

私は映画「ドミニカ」も「目を閉じれば見える」も、このロシア的な、ゴーゴリの言葉に通じるものがあると感じます。ロシアのコメディはだいたい自分たちの悪いところ、おかしいところを笑うのです。他人を笑うようなところはほとんどない。自分たちを笑って、笑い飛ばす。でもそこには悲しさ、切なさがつきまとう。そういう笑いです。

私はこの二人の監督と親しくお話をさせていただきました。まだまだ若い監督たちです。昔、ズビャギンツェフ監督が大学の研究室にいらした時、お若くて創造意欲に満ちあふれて、熱い情熱を感じましたが、この二人の監督も同じように深い熱意を持っています。今後のロシア映画というのは、きっとこういう若い監督たちが担っていくのだろうと私は楽しみにしています。

映画『予想外のでき事』 КУРЬЕЗЫ



ムイシュキン監督



アルザマソワ



コロソフ

©kinoportal.ru

映画「予想外のでき事」とロシア映画事情

さて、最後に今日皆さんがご覧になる作品を少し紹介しておきます。

上映される「予想外のでき事」は、やはり「ロシア映画祭 in 東京」2019年に公開された映画で、同じく若手のアンドレイ・ムイシュキン監督が制作した作品です。彼の映画監督としてのキャリアはまだ始まったばかりで、まだ粗削りな部分はあるかと思いますが、将来が楽しみな若手監督です。

主演女優はリーザ・アルザマソワさん。美しいロシア女性です。この女優さんはアメリカのミュージカル「アニー」の子役として舞台生活を始めているので、もう長いキャリアをもっています。日本でも、NHKのBS放送でマリーナ・アレクサンドロワ主演の「エカテリーナ」というドラマが放送されましたが、その第二シーズンにアルザマソワさんも出演していました。

主演男優はマクシム・コロソフさんです。コロソフさんはロシア映画界ではちょっと変わった経歴の俳優です。ロシアの映画界、演劇界というのは、映画大学で監督コースとか俳優コースを出る、つまり大学の授業などで監督や俳優のテクニックを学ぶ、というのがオーソドックスな流れになっています。卒業して俳優になり、どこかの劇団に所属して、舞台で活躍しながら映画にも出る、というのが通常の俳優たちの状況です。ですから映画監督には舞台監督もしているという人が多いわけです。劇場に所属して、舞台監督をして、映画監督もする。さらにテレビシリーズも作る。そんな感じです。

ところがコロソフさんは、もとはファッションモデルです。ファッションモデル出身の人が映画俳優になるというのは、ソ連時代だったらまずなかったでしょう。しかし今ではブロガーが急に映画に出演することもあり、映画大学を卒業していなくても映画に出演する人がちらほら出てきています。これもロシア映画界の新しい一つの流れだと思います。

ですから、「予想外のでき事」という映画もそういった意味で新しいロシア映画だということができそうです。本日私がお話しさせていただいたいろいろな要素を、皆さんもこの映画の中に見出されるのではないかと思います。

では皆さん、最新のロシア映画をどうぞお楽しみください。

ロシア伝統の味 12種類のハーブと蜂蜜のブレンド スピテン Sbiten <発売中>

スピテン(Sbiten)は、12種類のハーブと蜂蜜をブレンドしたロシアの伝統的シロップです。紅茶に少量混ぜれば即席ハーブティーが楽しめます。炭酸水、ホットワイン、アイスクリームやヨーグルト、サラダにかけてもおおいしくいただけます。JICでは、ロシア・エストニア国境近くに位置するブスコフ州ストルブシノ村で天然素材を使って作られた《ストルブシノ》スピテン・クラシック(250ml)を直輸入し、販売を開始しました。ロシア伝統の味をお楽しみください。

商品名:《ストルブシノ》スピテン クラシック 250ml

定価: 1本 1,944円税込み(1,800円+消費税8%)

配送料: 全国一律 550円

*ただし北海道 770円 沖縄 880円

*3本以上お買い上げの場合は送料無料

スピテンの お問い合わせ、ご注文は

ジェーアイシー旅行センター「スピテン販売部」へ

→ e-mail jictokyo@jic-web.co.jp TEL 03-3355-7295

◆◆編集後記◆◆

▼「1日100万回接種!」の掛け声とともにワクチン接種が急速に進んでいます。自治体の集団接種や企業・大学などでの職域接種が急激に進んだために、ワクチン供給が足りなくなって新規受付が停止されるなど、やはりこの国らしい混乱も一部見られますが、7月末には65歳以上高齢者の接種が完了し、10月頃には日本の成人人口の半分以上にワクチンが行き渡るだろうと予測されています。▼ワクチン接種の進展とともに、企業活動や社会活動が正常化し、外食やレジャー、旅行などの需要回復も急速に進むことが期待されます。EUやアメリカなどでは、7月からワクチン接種証明書(ワクチン・パスポート)が実用化され、国境をまたいだ観光移動が活発化しています。▼しかし、日本ではオリンピック開催前の東京に4回目の緊急事態宣言が発令され、埼玉・千葉・神奈川・大阪でもまん延防止等重点措置が8月22日まで延長されました。オリンピックは無観客開催となりました。▼新型コロナの終わりはまだ見えません。問題はワクチン接種の拡大が欧米諸国にとどまり、多くのアジア・アフリカ諸国ではワクチンが行き渡らないにまだ1年以上の時間がかかることと見込まれることです。ロシア・旧ソ連地域でのワクチン接種も進んでおらず、デルタ株変異ウィルスによって感染者数は逆に急増しています。持久戦はまだ続きそうです。▼JICは再起に備えるため6月に東京事務所を新宿1丁目に移転しました。事務所スペースは半減しますが、在宅テレワークなどを組み合わせ、従来と変わらぬ仕事量を維持し、旅行・留学相談にも取り組みます。これからも変わらぬご支援をよろしくお願いいたします。(F)

＊＊JICのロシア語留学・研修＊＊

30年間の実績「だから、JICのロシア語留学」

JICロシア語留学研修は、JIC国際親善交流センターが日本で最初に旧ソ連・ロシアの諸大学と直接契約により開始した私費留学システムです。この30年間でJICがロシアに送り出した留学生は長期・短期合わせて4,000名以上にのぼります。

安心の現地アフターケア

留学中はできる限り自分のことは自分でやっていただくのが語学力上達の道です。しかし、一人ではどうしても解決できない大学との交渉ことや、緊急事態の際の連絡対応など、留学される皆様のバックアップのために、JICでは各受入機関と緊密な連絡体制を整えています。

ロシア語長期留学4月生・募集中



オンライン
相談受付中!

期間: 2022年4月1日より10ヶ月

締切: 2021年12月15日

モスクワ国立大学 725,000円(授業料10ヶ月)/予価

サンクトペテルブルグ国立大学 790,000円(授業料10ヶ月)/予価

ゲルツェン教育大学 752,000円(授業料10ヶ月)/予価

ウラジオストク極東連邦大学 352,000円(授業料10ヶ月)/予価

ミンスク国立言語大学 344,000円(授業料10ヶ月)/予価

※上記の金額以外に別途、寮費、手配料、渡航費用、ビザ代金および取得手数料などががかかります。

◆JICロシア留学デスク◆

ロシア留学・旅行のお問合せ・ご相談に応じます。

お気軽にお越しください。

東京事務所 平日9:30-18:00 03-3355-7294

大阪デスク 平日9:30-16:00 06-6944-2341

※留学相談は、必ず事前に予約してお越しください

外国人のためのロシア語検定(TPKH) 練習アプリのご案内

JICが提携するモスクワのロシア語センターGRINTが外国人のためのロシア語検定(TPKH)の初級・基礎・第1レベル(大学入学の最低レベル)に対応する練習問題と模擬テスト、合格のための練習アプリを発表しました。

現在、AppStoreおよびGoogle Playで無料ダウンロードできます。できるだけたくさんのロシア語学習者の皆さんに使っていただき、是非、使い勝手や改善点、感想などを知らせしてほしいとのこと。是非、ご協力ください。

アプリの詳細(英語) <http://russian-language.ru/>

アプリはSEMESTERRUSで検索、ダウンロード可です。